

お泊まり保育園―サンプル―

「園長の丞です。よろしく願います」

「よ、よろしく願います」

ユータが頭を上げると、丞は穏やかな笑みを浮かべていた。

「緊張しないで。あとはもう、自然体でいたらいからね」

安心させる声だった。

年は二十代半ばだろうか。まだ若い。でも童顔なだけで二十代後半というのもありうるかもしれない。

「どうぞ座って」

ソファに腰を下ろし、手を太ももの上に置く。

「……緊張してるね」

ふわっとした笑み。年上だろうに、可愛らしい。

「まあ、ゆっくりね」

色白、低身長、細身、少し茶色がかった髪色。ふわっとして軽そうなのはくせ毛だからだろうか。

「じゃあ、研修を始めます」

渡された紙はたった一枚。高額なバイト代をもらえる仕事の説明が、たったこれだけでいいのだろうか。

「どんな仕事かは知ってるよね」

「はい……でも赤ん坊として過ごすってことしか……」

「うん、それだけ分かっただけで大丈夫」

丞はまた優しく微笑んだ。

「出勤したら最初に僕に顔を見せてね。あとはお客さんが来るまで部屋で待機。指名のお客さんが着いたら服を脱いで、ベビーカーに乗る」

「ベビーカー……さすがに乘れないと思うんですけど……」

小柄とはいえ成人男性だ。赤ん坊用のものに座れるはずがない。

おずおずと尋ねると、丞は自信ありげに頷いた。

「大丈夫」

おいで、と言われてついて行った先にあったのは、確かに大人でも乗れそうな大きさのベビーカーだった。日除けもあるし、落ちないようにするためのガードカバーには可愛らしい小さなぬいぐるみが下げられている。

「ハンドルは向きを変えられるから、向かい合った状態で押してもらうこともできるよ」

丞が操作すると、シートと同じ方向を向いていたハンドルが対面型に変わった。

「これに乗って、僕と一緒にお客さんのところまで行きます。そこでバトンタッチ。あとはお客さんにお部屋に連れて行ってもらってね」

大きさは違えど、見た目は完全にベビーカーだった。裸でこれに乗る——少しだけ気後れした。

「で、こっち」

促され、丞に続いて部屋を出る。廊下にはいくつものドアが並び、可愛いプレートが掛けられていた。

幼稚園や保育園のクラスは花や動物の名前に統一されているイメージがあったのに、プレートの名前はさくら、もも、めろん、くるま、こぶた……と統一性がない。

「どうかした？」

じつと見ていたことに気付いた丞が足を止めた。プレートを指し、疑問に思ったことを尋ねてみる。

「ああ、それはその部屋を使う子が好きなものの名前なんだ。ユータくんは何が好き？ 何でもいいよ」

「好きなもの……」

すぐには何も浮かばなかった。チョコレートは好きだけれど、赤ん坊はそんなもの食べないし、何より可愛げがないだろう。

「ふふ、あとでいいよ。ゆっくり考えてね」

案内されたドアには何も掛けられていなかった。おそらく研修用の部屋なのだろう。

室内はとても明るかった。壁紙は淡いクリーム色。床は一面にカラフルなパステルカラーのプレイマットが敷かれていて、入って左奥にはキッチンがあった。その手前にはプラスチックの柵。

その右側には真っ白な柵や本柵が複数並び、ドアから向かって右側には大きなベッドと柵付きのベビーベッドが並んでいた。どちらのベッドにもぬいぐるみがたくさん置かれ、ベビーベッドの方には備え付けられたメリーが回っている。

「お客さんに入ったら、あとは身を任せるだけだけど……今日は初めてだし、僕としてみようね」

(え……)

未経験の仕事なのだから、今のうちにきちんと学んでおいた方がいいことは分かっていた。けれど、プレイ相手はもつと男らしいタチっぽい人というイメージが強かったので……こんな可愛い人赤ん坊扱いされると思うと少し気まずい。

その思いを汲み取ったのか、丞が苦笑した。

「恥ずかしいよね。でも一度経験しておいた方がいいと思うから」

申し訳なさそうな顔を見たら、嫌だなんて言えなかった。

「本当はここに来た時点で裸なんだけど、今日は研修だから。全部脱いでくれるかな」

「は、はい……」

赤ん坊なのに自分で脱いでいいのだろうか——その疑問が伝わったようで、丞が笑った。

「お客さんに脱がされることはほとんどないんだよ。中には可愛いお洋服を持ってきてくれ

る人もいるかもしれないけど、だいたいはオムツ一枚で過ごすことになるから」

「寒くないんですか」

「大丈夫。体温管理も含めてちゃんとお世話してもらえから。みんな赤ちゃんが大好きだからね。希望者には研修もあるし」

「研修？」

「そう。まあ、座学だけだね。他にも保育士の付き添いがあるコースもあるから、そのときは僕や保育士と一緒に部屋に入ってお客さんに説明をしながらお世話をするよ」

「園長先生もするんですか」

「ふふ、園長なんて呼ばないで。立場は園長だけどくすぐったい」

「えと……じゃあ、丞先生？」

「うん、ありがと」

丞は外見だけでなく、内面も可愛い人だった。本当に保育の仕事が好きでやっている、と伝わってくる。

「じゃあ、さっそくしてみよっか」

頷き、服を脱いでいく。下着を脱ぐのは恥ずかしかったけれど、仕事だと言い聞かせてさつと下ろした。

「じゃあ、まずはオムツから。室内でお客さんがどのようにするかは分からないけど、たいていみんなオムツをしたがるからね」

指示されるがまま、大人サイズのベビーベッドに寝転がる。

生まれつき毛のない股間がスースーした。

「さっきも言ったけど、この部屋に入ったらもう何も考えなくていいからね。何かをしようとする必要もないから」

「はい」

「ちなみに、本番中は返事もなしね」

からかうように言われ、顔が一気に熱くなった。でも言われてみれば、返事をする赤ん坊なんていないだろう。

丞は慣れた手つきでオムツをあてた。腰を浮かすのには少しだけ協力をして、ギャザーの確認をもらう。

「赤ちゃんはがに股だから、膝を開くようにしてね。でも実際には関節の状態が違うから、痛くない程度でいいよ」

言われた通り膝を開く。すると、意外と心地よかった。

（あ、オムツがあるからか……）

足の間に障害物がある。足を動かし閉じてみようととしても、むしろ邪魔で閉じられないように思えた。

「ちくちくしない？ 大丈夫かな」

「はい、大丈夫です」

「敏感肌の子は少し蒸ただけで痒くなっちゃうから、この後違和感を覚えたらすぐに教え

てね」

「はい」

ベッドを降り——本当は抱っこで下ろされるらしいけれど、丞は力がないのでと笑っていた——今度はバウンサーと言われるゆらゆら揺れる椅子に座るように指示された。

「乳児を希望するお客さんだったら、だいたいはここか膝の上で過ごすことになると思う。ツンツンされたりなでなでされたりしながら過ごしてね。おしっことうんちは宣言せず勝手にすること。あとは……慣れるまではお尻を付けたままのうんちは難しいと思うけど、なんとか頑張って」

なんとか頑張って。

思わぬところで雑さが見えて、思わず笑ってしまった。

「先生、頑張ってたって」

笑いが止まらない。目じりに浮かぶ涙を拭いながら言うと、丞はぶくつと頬を脹らませた。それをするとか余計に幼く見える。

「だってこればかりは慣れなんだよ。みんな慣れるまでは軽い下剤飲んでるし」

「え、下剤？」

「そう。でもお腹が痛いと感じない程度の優しいやつだよ。整腸剤に近いかな。うんちできるとお客さんも喜ぶからね」

「……そうなんですか」

排便で喜ばれるなんて、想像がつかない。

「うん。でもうんちのときに恥ずかしがったらダメだよ。赤ちゃんはうんちもおしっこも、恥ずかしいなんて思わないからね」

「……はい」

ここでの仕事は指名制だ。受付が斡旋してくれることもあるようだけれど、せっかくお客さんをつけてくれてもリピートしてもらえなければ意味がない。

「研修中に、おしっこはしてね」

続いてはミルクの飲み方だった。哺乳瓶を口に当てられ、吸ってみる。しかし口内にはにじむ程度のミルクしか入って来ない。

「飲めません」

素直に降参すると、丞が笑った。いたずらっ子の笑み。

「コツがあるんだよ。最初は難しいよねえ」

まるでさっきの仕返しと言わんばかりの笑みだ。人懐っこい人。

「舌と上あごで乳首の先を潰す感じ。本当の赤ちゃんが使う哺乳瓶より出やすくはなってるから、やってみて」

~~~~~

丞には大丈夫だと言われたけれど、やはりどうしても不安を拭い去ることはできなかった。

それでも予約が入っていると言われればキャンセルしてもらうわけにもいなくて。

(どうしよう……)

ちゃんとできるだろうか。

コンコン——。

「つあ、は、はいっ」

「ユータくん、お客様。ロングコースだよ」

「はい……」

ロングコース……初めての仕事だというのに泊まりだなんて。

「大丈夫。ゆったりしておいでね」

服を全て脱ぎ捨て、丞が押してきた大きなベビーカーに乗り込む。ベルトを装着すると、ベビーカーはゆっくりと動き出した。

(気持ち悪い……)

緊張しすぎて吐き気がする。でも体調が悪いという表情を浮かべることは許されない。心を落ち着かせるため、深呼吸を繰り返す。

動きはゆっくりなはずなのに、あつという間に部屋を出てしまった。

息苦しい。気持ち悪い。胸元を押さえないけれど——できない。

「わ、可愛い！」

聞こえた明るい声に顔を上げると、そこにいたのは丞とそれほど体形が変わらない小柄な男性だった。三十代の半ばくらいだろうか。可愛らしい、いかにもネコっぽい外見。

(え、この人……?)

この人が、成人男性を赤ん坊として可愛がりたいというお客さんなのだろうか。

「ユータくん、よろしくね。充です」

(充さん……)

充と名乗った男性は丞と場所を代わり、ベビーカーの向きを対面に変えた。明らかに手慣れている。

「じゃあ、行こうか」

昨日の研修のときには静かだった廊下には、絞った音量で童謡が流れていた。明るい歌なのに、それを聞いても心は緊張で強張っていくばかり。

「えーつとお部屋は……」

そういえば、好きなものについて答えていなかった。部屋のプレートには何と書かれているのだろう。

知リたかつたけれど、対面のベビーカーでは確認することができなかった。

(たぶん、すぐ辞めるから確かめなくてもって思われたんだろうな……)

自分で無理だと言っておきながら、そうやって切り捨てられたように考えるのは身勝手だ。そう思うのに、何度も丞の慰めと励ましを受けたことを思うと、あれは嘘だったのかと卑屈になってしまう。

(……まあ、本当にこれが最初で最後かもしれないし……)

お店だって商売なのだから、自信がない人間を雇い続けてもメリットはない。それならすでに入っていた予約だけこなさせてしまった方がいいと考えるのは当然のことだ。

（今日だけでも頑張ろう……）

そうでない、来てくれた充にも、研修をしてくれた丞にも申し訳がない。

気持ちを切り替えたちようどその時、充がベビーカーを覗き込んだ。

「可愛い。さあ、ベッドに行こうか」

連れて行かれるのはベビーベッドだと思っていた。しかし充に導かれたのは、二人で寝られるようにと用意された大きなベッドの方だった。

「最初にオムツをしようね。どうかなあ、オムツ、苦手かな」

返事は求めていないようだったので、そのまま無視をした。でもどこを見たらいいかさえ分からなくて、焦る。

（どうしよ……）

いったいどうしたらいいのだろう。丞は何もしなくていいと言っていたけれど、何もしないというのも難しい。

（つい返事しちゃいそうになるよ……）

自分より年上と分かっている人の言葉が無視するのは難しい。どうしても反射的に返事をしないと失礼なのでは思ってしまう。

「まだ赤ちゃんだからテープにしようね」

腰の下に差し込まれる細い腕。さすがにこのままではいけないと思いつつ、腰を上げてしまってもいいものか悩む。

（昨日もつと質問しておけばよかった……）

研修の際はさりげなく腰を上げたような気がする。でも丞はそれをしなくていいとは言わなかった気がする、やはり上げてもいい……のだろうか。

（うああ……分かんね……）

でもこの細い腕でユータの腰を持ち上げられるとは思えなかった。さすがに今日が初めてということは丞も伝えてきているだろうし——おずおずと腰を浮かすと、充はその瞬間すばやくお尻の下にオムツを差し入れた。

「いいこだねえ。ありがとね」

さらりと撫でられた太もも。やはりバレないはずがなかった。それでも怒られなかったことに胸をなで下ろす。

「まだオムツは慣れないかもしれないけど、おしっこで濡れちゃうと気持ち悪くなっちゃうからね」

どうやら初心者相手でも相当慣れているようだ。てきぱきとオムツをあてると、足の付け根の部分に人差し指を入れて締め付けとギャザーの様子を確認していた。

「うん、これでいいかな。じゃあミルクを作ってくるね」

（あ……）

つい不安になってしまった。本当なら、知らない人に世話をされたことに泣くくらいの方がいいはずなのに。

「ん？ ……ふふ、可愛い。まだお腹は空いてなかったね」

視線に気付いた充は優しく微笑んで隣に寝転んでくれた。優しく頭を撫でられ、頬を突かれる。

「あーほんつとうに可愛い。生まれたての赤ちゃん……」

感じ入るような声に、充が本当に赤ん坊を好きなことが伝わってきた。自分の子供でもなければ、そもそも本当の子供でもないというのに、まるで愛おしくて仕方ないというかなうな。

（あ……園長が言っただのってこれだったのかな……）

保育士時代の保護者について、親ばかだったと言っていた。何をしても可愛い、何もしなくても可愛い……まるで今の充みたいだ。

「僕ね、赤ちゃんが可愛くて大好きなんだ。甘えん坊もわがままも全部可愛い」

充は嬉しそうにそう言う。

けれど今の自分の状態を想像してみると、とても赤ん坊には見えないだろう。

体型については大人なのだから仕方がない。締めようにも締められない——いや、背中を丸めた方がいいのかもしれない。テレビで見た本物の赤ん坊は、背中を丸めて手足を浮かせてバタバタと動かしていたような気がする。

（……よし）

不思議と緊張は落ち着き始めていた。すると今度は、これからどうなるのだろうという不安より、少しでも充を喜ばせたいという気持ちの方が強くなる。

かといって、伸ばしたままの手足を上げればサイズが大きすぎるだろう。

肘と膝は曲げたまま、手首と足首だけを動かしてみる。

「あ……」

すると、充が大きな目をさらにパッチリさせて上体を起こした。

失敗したのか——いや、失敗ではないようだった。

充はまるでプレゼントをもらった子供のように、驚きから喜びへと表情を変えた。

「かわいい！ あんよとおてて、とつても上手に動かせるね！」

ただ動かしているだけだ。なのに充は飽きもせず見つめ続けた。

（……え、これいつまでやんの？）

普段しない動きだからか、すぐに手足が重くなってきた。しかし充は嬉しそうな表情のまま。

（や、ちよつともうやめたい……）

しかしやめるきっかけが掴めなかった。スツとやめてしまえば興ざめだろうし、かといって疲れたと言うわけにもいかない。新生児の設定では寝返りさえ打つことはできない。

（ううう……あ）

そうだ、感情は態度で表せと丞は言っていた。大人のように疲れた様子を表わすわけには

いけないけれど、もし赤ん坊が疲れたら——きっとぐずるだろう。  
「ううう」

「ん？ どうしたの？」  
「うう……」

（ぐずるって、どうやるんだ……？）

思い浮かぶのは「や！」と騒ぐ子供の姿。しかしそれは赤ん坊ではない。

「……どうしたのかな、お腹空いた？」

充は心配そうな顔でユータのお腹を撫でた。

違う、疲れたのだ、と言いたいけれど言えないもどかしさ。

（赤ん坊って大変……）

この後、本当にお腹が空いたり、暑い寒いがあつたとしてもうまく伝えることができないかもしれない。

——それって、とても怖い。

（どうしよ……）

でも今はとにかくこの手足をどうベッドに戻すかだ。疲れて手足の動きは止めてしまったものの、この先どうしたらいいのか分からない。

（どうしよ……）

でもとりあえず、ぐずるしかない。

首を振り、もう一度手足をバタバタと動かす。

手足が重い。だるい。でも他に方法が浮かばない。

「ふふ、可愛い。あ、ぬいぐるみと遊ぼうか」

おや、と思った。

（もしかして伝わっちゃってる……？）

疲れではなく、この戸惑いが伝わってしまっているような気がした。なぜかは分からないけれど、なんとなく、充の目が「大丈夫だよ」とまるで許しを与えてくれているように見えたのだ。

「あ、可愛いよねえ、これ」

充が動いた。けれど動きを視線で追うわけにもいかない。

（これって何……？）

おとなしく待っていると、お腹に明るい色のものが置かれた。昨日も見た、七色のイグアナだった。

（げ、またこれ……）

可愛くないわけではない——が、可愛いとも思えない。バウンサーに乗っているときに渡された犬のぬいぐるみは可愛かったのに。

（ん？ ってことは、ここは昨日と同じ部屋？）

辺りを見たい。でも室内を気にする新生児なんてきつといない。

（まあいいか……）



それにしても、やはりすごい配色のイグアナだ。

「ふふ、可愛い。とっても似合うね、イグアナ」

——これは褒められているのだろうか。

喜んでいいのか分からず視線を逸らすと、充は不思議そうな顔をした。

「あれ？ イグアナ好きじゃなかったかな」

どうやら察しがいいらしい充は、イグアナを持ってベッドから降りた。次はいったい何を持ってくるのか——気になるけれど、寝返りも打てない設定では背中を追い続けることもできなかった。

「ユータくん、可愛いの持ってきたよ」

戻ってきた充に視線をやると、手にあったのは三十センチほどのナメクジだった。

~~~~~

「あの、予約した大森といいますが」

「あ、大森さま。おかえりなさい」

半年前に見つけた男性用エイジプレイ専門店。

以前から興味がありつつ、なかなか予約できなかったのは緊張で予約のアイコンをクリックすることができなかったからだ。しかしどうしても興味を抑えることができず、毎日毎日ホームページを見続けた。

「ユータくんですね」

「は、はいっ」

ユータくん。このお店に三か月前に入ったばかりの男の子。

半年間も眺めるだけだったお店について予約をすることができたのは、どうしてもユータを可愛がりたいという一心からだ。本当は入店直後に予約したかった。でも仕事が忙しく、どうしても仕事の都合をつけることができなかったのだ。

（やつとだ。やつと……！）

ようやくユータに会うことができる。この三か月、もしかしたら急な退職をしてしまうかもしれないと思うと気が気でなかった。

「ではこちらをご確認ください。変更のご希望がございましたらご遠慮なくどうぞ」

渡されたクリップボードとボールペン。案内された個室のソファに座って一番上から一文字ずつ丁寧に読み込んでいく。

（名前、住所、電話番号……）

予約の際に入力したものに間違いがない。番地も部屋番号も、電話番号も合っていた。

続いて指名相手。こちらにもきちんと「ユータくん」と書かれている。

（よし、大丈夫）

自分の情報とユータを希望する旨が正しく入力できていたことに胸をなで下ろすと、「園長」と書かれた名札を付けた男性が紙コップのお茶をテーブルに置いてくれた。

「どうぞ」

「ありがとうございます」

園長が向かいの席に腰掛けたのを見て、もう一度書類に視線を落とす。

(ロングコースお泊まりの十八時から翌朝十時……)

これも希望と相違ない。少し短過ぎたろうかと思っただけ、初回から長時間ではユー
タの負担になるかもしれないと思い直して続きを読む。

(保育士指導の希望の有無……あ、これ……)

「すみません」

「はい」

「保育士指導の有無についてなんですが、これはここで口頭での説明をいただくということ
なんでしょうか」

ホームページの「初めての方へ」と書かれたページ。そこにあったのがこの「保育士指導」
だった。

「二通りございます。座学で育児の基礎を学ぶ研修コースと、実際に赤ちゃんのお世話をし
ながら指導を受ける子育て学級コースです」

「あ……私は育児が初めてなんですが……」

育児プレイに興味はあった。しかし相手もいなかったたので、実際にはミルクを作った経験
すらない。育児にどれほどの知識が必要なのかさえ分かっていなかった。

「では今日は保育士指導ありで、子育て学級コースにいたしましょう。途中で赤ちゃんとい
人きりになりたくなれば退室いたしますので、何をどうお世話したらいいのか分からないと
いう方にはとても好評です」

「ではそれをお願いします」

それなら安心だ。興味があるからといってユータを危険な目に付き合わせるわけにはいか
ない。

「今日空いているのは僕だけなんですけど、よろしいですか」

「園長自らしてくださるんですか」

「よろしいどころかとても心強い」

「よろしく願います」

ありがたい申し出に頭を下げ、改めて書類の確認を続けた。

(プレイ年齢は……新生児、よし。それから……)

どうやらしばらくは指名がない場合に記入する欄が続くようだった。

希望のプレイ年齢、実年齢、ペニスの包皮の状態、離乳食の希望、性格……と好みを尋ね
る項目が並んでいた。

(希望はユータくんだから……)

「あ、この成長の有無、というのは何でしょう？」

「それは赤ちゃんの成長です。ずっと新生児のままがいいという方もいらつしやいますし、
少しずつ成長して、一歳や二歳といった希望の年齢で成長が止まるのを求める方もいらつし

やいます」

「成長……」

「成長は個人によつて違いますが、目安としてはハイハイが見たければ八か月くらいでしようか。その頃なら離乳食も始まりますが」

ハイハイはぜひ見たいと思った。立ったり歩いたりとは……いらないだろう。

成長有り、八か月頃までと記載してクリップボードを園長に向ける。

「これでお願いします」

「ご確認ありがとうございます。ではユータくんのお迎えに行ってきますので、ここで少々お待ちください」

「はい。よろしく願います」

パタンというドアの音が聞こえると、一気に緊張感が増した。あまりの動悸に心臓が痛い。

(もうすぐユータくんに会える……)

逸る気持ちを抑え、お茶を一口飲みこんだ。

※ ※ ※

「ユータくん、大森さまがいらっしゃったよ」

「あ……う」

お気に入りのハリネズミのぬいぐるみ。もう少し遊んでいたかった。ぎゅう、と抱くと丞がしゃがんでほほ笑んだ。

「ハリネズミさんとお話してたのかな。初めての方だし、今日はハリネズミさんと一緒に行こっか」

丞の手で服を脱がせてもらい、ベビーカーに全裸のまま乗り返む。

「はい、ハリネズミさん」

お腹に優しくハリネズミを置いてもらい、撫でながら流れる景色を見た。

「ユータくん、はじめまして」

大森はとても優しくそんな顔だった。年は三十代後半だろうか。目じりが垂れ、微笑むと笑いが見える。

「……まだ緊張しているみたいで」

反応を返さなかったからか、丞が助け舟を出した。

「いえ、そうですよね。突然知らないおじさんに覗き込まれても怖いですよね」

大森はそう笑ったけれど、声も表情も少しだけ寂しそうに見えた。

(悪いことしちゃったかな……)

でも初めてだからこそ距離をおきたかったのだ。

入店から三か月、ありがたいことにたくさんのお客を指名をいただいて、いろんなタイプのお客さんに可愛がってもらった。

オムツ替えも授乳も下手なのに、寝るときはずっとトントンしてくれて、夜中もユータが

起きるとすぐに目を覚まして寝付くまで根気よく抱っこしてくれる、そんな優しい人もいたし、オムツを替えるのが好きだと言いながら、ユータのペニスを見た途端「可愛いのに閉じ込めるのは可哀想」とオムツを使わない人もいた。

他にも便秘のお世話が好きで便秘のタイミングにだけ予約を入れ、根気よくアナルをマッサージしてくれる人や、着飾るのが好きでたくさん可愛いスタイやオムツカバーを持ってきたのは「似合う」「可愛い」と愛でてくれる人もいた。

どの人もみんな優しく、研修のときに抱いた叱られる恐怖心はいつの間にかスッと消えてなくなっていた。でも今はその分、離れるときがとても寂しい。

「突然ごめんね、仲良くしてくれたら嬉しいな」

失礼なことをしたのはユータなのに、大森は床に膝をつき、目の高さを合わせてからそう言ってくれた。

「あう……」

「っ！ 今お返事をしてくれました！」

小さな声を出しただけなのに、大森は満面の笑みで、自慢するように丞を振り返った。それを見て、なぜか胸がどきりとした。

「ユータくんもよろしくと言ったのかもしれないね」

丞の言葉に大森が大きく頷き、もう一度ベビーカーの中を覗き込んできた。

「あ、オムツもまだなんですね。寒くないかな」

大森も、他のお客さんと同じだった。丞が研修の際に言っていたように、性的な欲望を見せない。ペニスを見ても視線を止めることなく、性的どころか体調を気にして、脱いだ上着を掛けてくれた。

「おしっこが出ると汚れてしまいますが」

「かまいません。風邪をひかせてしまうのが嫌なので」

大森の言葉に丞が驚いた顔をした。しかしすぐに、嬉しそうに笑う。

「では参りましょうか」

丞によって対面向きに直されたベビーカーを、大森はとても嬉しそうな顔を浮かべながら優しく押した。

「こちらです」

着いたのは普段ユータが使っている個室だ。

ドアにかかったプレートを見て、大森が不思議そうな声を出した。

「ん？ ハリネズミ？」

「ユータくんはハリネズミが好きなんです」

「ああ……では抱いているのはハリネズミだったんですね」

「見えませんでしたか」

「いえ……ユータくんしか見ていませんでした」

予想外の大森の返事に、丞だけでなくユータもつい笑いそうになってしまった。慌てて横を向いてハリネズミのお腹に顔を埋める。

「あ、ごめんね、ハリネズミ、取ったりしないからね」

焦った声。そんな風に思っていないのに。

きつとすぐくすぐく、優しい人だ。

「中へどうぞ」

笑いをこらえきれない様子の丞がドアを開け、三人で中に入った。

「大森さまは——」

「あ、さまなんて呼ばないでください」

「……では大森さんと呼ばせていただきますね。大森さんはユータくんを抱き上げられますか」

「五十二キロでしたね。大丈夫です」

体重まで把握してくれているとは思っていなかった。それに抱き上げてくれるなんて。

「では最初にオムツをしようと思います。ベビーベッドに寝かせてください」

ベルトを外し、大森が首と膝の後ろに腕を差し入れた。思っていたよりも、太い。

（鍛えてるのかな？）

それとも体力を使う仕事をしているのだろうか。

ここのお店は利用料が高いせいか、どちらかというとスーツ仕事の人の方が多く、がっちりした人はあまりいないけれど。

（まあなんでもいいや）

個人のことを知る必要はない。会うのはここだけだし、話すことだってないのだから。

「怖くないからね」

「んう」

腕を上げると、体がふわりと宙に浮いた。ものすごい安定感。

「さあ、ねんねだよ」

ベッドに下ろされ、ぎゅっとハリネズミを抱く腕に力を入れた。

「怖くないからね、大丈夫だからね」

何度も同じ言葉を繰り返すと、大森が体に掛けたままだった上着を取った。途端に体に空気が触れ、寒く感じる。

「あううう」

「ああ、寒かったかな」

大森はすぐに上着を掛け直してくれた。温かい。それに大森の匂いがする。

「あーう、うー」

「ああ……可愛い……」

大森がぼうつとした顔で見下ろしてきた。でもそれに反応を返すわけにはいかない。

「なーう、んー」

声を出しながらハリネズミを抱く。すりすり顔顔をこすりつけ、体を握る。

「ふふ。では大森さん、ベビーベッドの柵を上げましょう。ユータくんはまだ寝返りができませんが、赤ちゃんはいつ何をするかわかりませんので」

「はい」

ベッドの長辺の柵が上がると、開いたままの短辺側に大森が立った。

「オムツはあの柵の一番下に入っています。何枚使っていただいてもかまいません。もったいないと思うず、少しでも汚れたら替えてあげてください」

「分かりました」

丞がオムツを一枚取って戻ってきた。それを大森が受け取り、開いてみる。

「テープですね」

「はい。ハイハイするようになったらパンツタイプに変わります。まずはお尻の下にこちらを差し込んで——」

大森は初めてという割に上手だった。丞の説明の通りにテープを留め、締め付け具合も確認をしてくれる。

「最初はオムツ漏れしてしまうこともありますが、徐々に感覚が掴めてきますので」

「分かりました」

「では次、ミルクを作りましょうか」

「はい。……あの、ユータくんはこのままここに？」

「はい。柵をきちんと最後まで上げて、ロックもしつかり確認すれば一番安全ですから」

「どうやら離れるのを寂しいと思ってくれているようだ。嬉しい。でも早くミルクを飲ませてみてほしい。」

「んなう！　んな！」

「ああつ」

ぐずるように足をバタバタさせると、大森は慌てた様子で抱き上げてくれた。力強い腕。本当に子供を抱くように軽々と抱えてくれる。

「んあ！　んなあう」

「うん、ごめんね、一人は嫌だったね」

もう少し抱っこしていようか、と大森はあやすように体を揺らした。楽しいし落ち着く。でもミルクも飲みたい。

「んあああ！　なああう！」

「あつ、ごめんね、怖かった？」

揺れが止まった。でもそれはそれで物足りない。

「んなあああああ！」

「ああつ！　園長先生、すみません、ユータくんはどうしたんでしょう」

大森の、本心から慌てている様子に好感が持てた。ユータを心から赤ん坊だと思ってくれているのだ。

「きつとお腹が空いたんでしょう。でも抱っこから下ろされるのも嫌っていう赤ちゃんによくあるわがままですね」

丞が笑いながら言う。でも大森は全く笑わなかった。困ったように眉尻を下げる。

「あ……そうなんですね。どうしたらいいんでしょう……」

そんなの、どちらかを取るしかないのだ。今は丞がいるけれど、いつだって誰かが助けてくれるわけではない。

今までのお客さんもみんな、「ごめんね」と言いながら離れていった。でもそれは仕方のないこと——というか、そもそもわがママを全て満たすことなどできないのだから、どちらかを取るのは当たり前のことだ。

しかし大森は優先順位が分らないようだった。あやすように体を揺らしながら丞を見る。「泣いているのは可哀想ですが、お腹を空かせたままにするのも可哀想です。大急ぎでミルクを作ってしましましょう」

大森が丞の提案に頷いた。ゆつくりとお尻から下ろすようにしてベッドに寝かされる。

「んなあああう！」

腕が離れる前に暴れると、大森は慌てて抱き起こしてくれた。それからもう一度体を揺らし、あやしてくれる。

(気持ちいい……)

揺らされる心地よさだけでなく、わがママを聞いてもらえろという幸福感。

~~~~~

仕事を休んで二週間が経った。

いい加減求職活動を本格的にやらなければならないと分かりながら、どうしても履歴書を送ることができずにいた。

きつと始めてしまえば仕事は楽しいだろう。もともと働くのは嫌いではなかった。でも選考で落ちるのが怖かった。「お前の居場所はない」と言われているような気がして。

居場所——ずっと欲しかったもの。ようやく大森の腕の中にそれを見つけたようなつもりになっていたけど、それはやっぱり幻想だった。「この腕の中に帰ってきたい」と会う度思っていたけれど——。

(それなら……そう思ってたのにどうしてわがママばかり言っただろう……)

嫌われないようにいい子でいるべきだったのに、体が勝手にエスカレートした。ぐずっても怒るどころか嬉しそうに笑ってくれる大森が好きで、そのときだけは愛されているのだと錯覚できたから。でも本当に錯覚だった。結局嫌われ、また居場所を失ってしまった。

——もう、終わりでもいいのかもしれない。

もともと生まれてきた意味も理由もなかったのだ。ただなんとなく生きていなきやいけないような気がしていただけで。

でもそれなら、最後におじさんに会ってお礼を言いたいと思った。

本当は丞と大森にも挨拶をしたかったけれど、丞はともかく大森には会えないし、実際に会うのも少し気まずいような思いがあった。

(不義理だけど……)

でも承だって仕事なのだ。仕事にならない相手に時間を割くのはデメリットでしかない。

(……おじさんに電話、してみようかな……)

おじさんに会えば、また生きる気力が湧いてくるかもしれない。

携帯を手にしたとき、突然画面が切り替わった。表示されているのは「保育園」の文字。もしかして、大森の予約が入ったのかもしれない——高鳴る胸を押さえて通話ボタンを押した。

『あ、もしもし』

電話の相手は丞だった。

「……もしもし」

緊張で胸が痛かった。

大森に会えるかもしれない。

『ユータくん、最近どう？　ちゃんと食べられてる？』

「あ……」

声色と言葉で分かった。別に大森からの予約が入ったわけではないのだ。

「……はい、大丈夫です」

『そう……よかった』

いったいどうしたのだろう。ただの様子伺いだろうか。

「あの、何かありましたか」

きつと予約が入ったのであれば——いや、そもそももう休職という形になったのでホームページにも載っていないはずだ。予約が入るということはありえない。

『あのね、ユータくんさえよければ、なんだけど』

「はい」

『ユータくんを引き取りたいってお客様がいてね』

「え……？」

引き取る——？

『そう。卒園制度って、分かるかな』

「あ……はい、一応説明は……でも誰が？」

思い当たる人はいなかった。いたとしても大森だったけれど、大森ならば丞はきつと最初にそう言ったことだろう。

『それが……ユータくんが入ってすぐに予約で来てくれたお客様なんだけど……』

丞はお客様の名前や風貌を伝えてくれたけれど、初期に一度来てくれただけとあって少しもピンとこなかった。

(でもどうしてそんな人が……？)

数回来てくれた人なら理解できる。でも初期にたった一度会っただけの人が卒園を希望するなんて——。

『でも僕は、大森さん……大森さんを待つのもいいと思うんだ』

「え……？」

『仕事、きつとかなり忙しいんだと思う』



いったいどうして今大森の話をするのだろう。もう嫌われてしまつて、逃してしまったお客さんだというのに。

『来られなくなる前、ユータくんの離乳食の話もしてたんだよ。だから、落ち着いたらきつとまた来てくれると思う』

「……いえ、いいんです。俺、わがままばかりだったから」

『それはっ!』

「はい？」

『……うん。でも——』

「卒園つてどうすればいいんですか」

『え……?』

驚き、言葉を失ったようだった。そもそもこの話を持ち掛けてきたのは丞の方だというのに。

「俺でもいいつて、言ってくれてる人がいるんですね」

『ユータくん、』

初期にたった一度だけ——なのに卒園を希望される。きつと何か理由があるのだろう。情が入っていない赤ん坊が必要(・・)だとか。

おそらく同じように考えているからこそ、丞はこうして大森の名前を出して引き留めようとしている。

そう分かつていても、行きたいと思った。

(俺の居場所……)

求めてくれる人がいるというのが嬉しかった。

「園長だつて、断るのは大変でしょう」

『違うよ、ユータくん、僕は』

ずるいな、と思った。もし本当に大森を待たせようと思うなら、こんな話、しなければよかったのだ。

きつと丞の園長という立場上、黙ったまま断るなんてことはできなかったのだろう。

——それでも。

それでも、本気で待たせようと思うなら言わなかったはずだ。それで、あとになって「実はこういう話があつたけど」と言ってくればよかった——いや、でももしそう言われたら、ユータはきつと怒つただろう。どうして勝手に断つたんだと……。

(身勝手だな……)

自嘲的な笑いが漏れた。

(こんなだから……だからみんな……)

「すみません、やつぱり誰なのか思い当たらないです。でも俺、卒園します」

『ユータくんっ、でもね、』

もし本当に大森が来てくれるつもりがあるなら待ちたい。でもきつと、さっきのは丞の優しい嘘だ。嘘ではなく、気遣いと言った方が正しいのかもしれないけれど。

（来るか来ないか分からない迎えを待ち続けるのはもうこりごりだ……）

十五年……いや、二十年待った。いつか両親が迎えに来てくれるのではないかと。祖母の家に迎えに行ったらもういないと言われ、工場を訪ね、どうにかそうやって足跡を辿ってここに迎えに来てくれるのではないかと――。

でも来なかった。

両親が尋ねてきたという連絡だって、一度も入ったことがない。

（もう、いい……）

期待しただけ傷は広く深くなる。

「いつ会うことになりますか」

『あの、ユータくん、でもね、卒園するってことは――』

「希望、してくれてるんですよね、俺を」

求めてくれる人がいる、というのが救いだった。それがたとえ大森でなくても。

『ユータくん、』

「なるべく早く行きたいです」

初めて求めてもらえた。

例え、何か理由があったとしても。

『……一度、説明するから。後日お店に来てくれる？』

「明日はいいがですか」

『……分かった。十五時はどう？』

「分かりました」

通話を切ると、痛いくらい鼓動が強くなっていることに気が付いた。

（……俺が欲しいって……）

相手が大森でないことは残念だったけれど、おそらく卒園を考えていないであろう大森に縋り付いているより、こうしてストレートに求めてくれる人のところにいく方が幸せなはずだ。

それに相手を覚えていないということは、特に目立った悪い部分もなかったといえる。

（……やっと……居場所ができる）

嬉しいはずなのに、喜び以外のものを胸に感じていた。

ハピエンです！

約 17 万字です。

よろしくお願いいたします！

お泊まり保育園—サンプル—

gooneone (うーむむむむ)

2021/ 2/ 17

メール: gooneonegooneone@gmail.com

pixiv : 19591291

Twitter: gooneone11

LINE: gooneone

